

生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近（1年次）

1 研究主題の設定

(1) 研究の目的

私たち和歌山大学教育学部附属小学校の教員は、子供たち一人一人が幸せに生きること、そのために必要な力を身に付けていくことを日々願って子供たちの前に立っている。子供たちも、児童会が中心となり、学校スローガンを「みんなでみんなを幸せにする学校」と昨年度に設定した。

では、私たちが「幸せに生きる」とはどういうことなのだろうか。例えば、「周りの人と仲良く関わりながら楽しく過ごしている」「将来、自分が選んだ仕事に就いて活躍している」などが考えられる。幸せの感じ方には一人一人に違いがあるのは当然である。自分が幸せだと感じている場合であっても、周囲の人々の中には幸せだと感じていない人もいよう。

本校で大切にしたいのは、本校に関わるすべての人が共有できる幸せである。自分の幸せだけを追い求めるのではなく、自分の周りの人々も幸せを感じているかどうかという視点をもてるようになることである。「みんなでみんなを」と子供たちが考えているのは、子供たちも教員たちと同じ思いをもっているととらえられる。

本校教員の思いや子供たちの掲げる学校スローガンを実現するためには、自分も周りの人も、共に幸せに向かう力を身に付け、身に付けた力を発揮していくことが求められる。この大きな課題に向けた初期研究を今年度は進めていきたい。

(2) ウェルビーイング、生徒エージェンシーとは

まずは、「自分も周りも幸せに向かう力」とは何かを明らかにしたい。本校では、これまでに予測不可能な時代を切り開く力として探究力と省察性¹を設定し、研究に取り組んできた。幸せに生きるためには、それらの力に加え、よりよい社会を共につくろうとする力が重要になると考えた。そこで、本校が目にしたのは「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」(図1)²(以下、「ラーニング・コンパス」と略記)である。

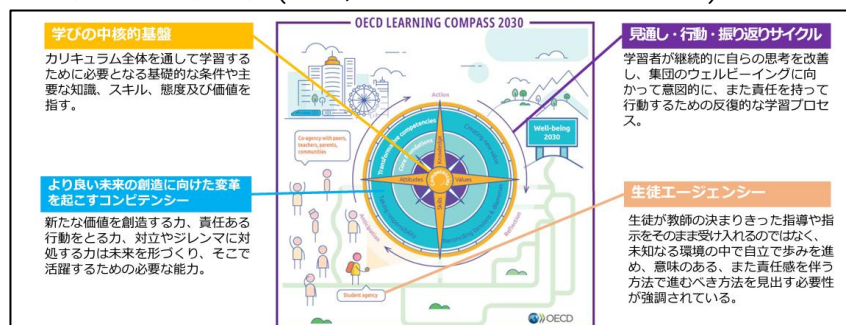


図1 OECD Learning Compass 2030 (文科省 資料「新たな教師・教職員集団の持続的な成長について」より引用)

¹ 2018年度から2022年度まで本校では身に付けたい力を探究力と省察性として研究を進めてきた。探究力を「各教科等の見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、問題の解決に取り組む資質・能力」、省察性を「各教科等の見方・考え方を働かせながら、自らの学びにおいて学びの方法や道筋を調整・改善したり、学びを意味付けなおしたり、学んだことを自己の生活や行動につなげなおしたりする自己効力感に支えられた資質・能力」とそれぞれ定義した。

² OECD Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework LEARNING COMPASS 2030 を文部科学省が書き加えた図

ラーニング・コンパスの中で示されている目標とは、社会全体のウェルビーイング（well-being）である。

ウェルビーイング（well-being）；
身体的・精神的・社会的にも持続的に良好で調和のとれた幸福の状態

社会全体のウェルビーイングの考え方は、「自分だけでなく周りも幸せにする」という本校教員や子供の願いとつながっている。ラーニング・コンパスに示されている力を身に付けていけば、教員の思いや学校スローガンの実現につながると考えた。特に、本校ではラーニング・コンパスの中心的な概念に位置付けられている「生徒エージェンシー（Student agency）」に注目する。

生徒エージェンシー（Student agency）；
変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力

生徒エージェンシーとは、ウェルビーイングに向かうための原動力となるものである。

白井（2020）は、生徒エージェンシーは多様な能力の集合であり、以下のような力が含まれると述べている。³

- ① 結果を予測すること（目標を設定すること）
- ② 自らの目標達成に向けて計画すること
- ③ 自分が使える能力や機会を評価・振り返ること
- ④ 自分をモニタリングすること
- ⑤ 逆境を克服すること

ここから、子供たちが生徒エージェンシーを身に付け、発揮していくことで、社会をより良いものへと変えることができ、共に幸せに向かっていくことへとつながっていくと考えた。「OECD ラーニング・フレームワーク 2030」（以下、ラーニング・フレームワークと略記）では、①知識、②スキル、③態度・価値というコンピテンシー（competencies）⁴が不可分一体のものとして絡み合い、さらに「より良い未来の創造におけた変革を起こす力」（①新たな価値を創造する力、②対立やジレンマに折り合いをつける力、③責任ある行動をとる力）を備えるため、見通し（anticipation）・行動（action）・振り返り（reflection）の「AARサイクル」を回しながら、ウェルビーイングを目指すイメージが描かれている（図2）⁵。

コンピテンシー（competencies）；
ある職務または状況に対し、基準に照らして効果的、あるいは卓越した業績を生む原因として
かかわっている個人の根源的特性

³ 白井俊 「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来」 p.79 より引用

⁴ 白井俊 「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来」 p.2 より引用 具体的には、動因、特性、自己イメージ、知識、スキル、から構成される複合的なものとして位置付けられている。（Spencer 夫妻、1993）

⁵ The OECD Learning Framework 2030 必要とされる主要な知識、スキル、態度及び価値は、読み書き能力やニューメラシー（数学活用能力・数学的リテラシー）、データ・リテラシー（データ活用・解析能力）やデジタル・リテラシー（デジタル機器・機能活用能力）、心身の健康管理、社会情動的スキルとされている

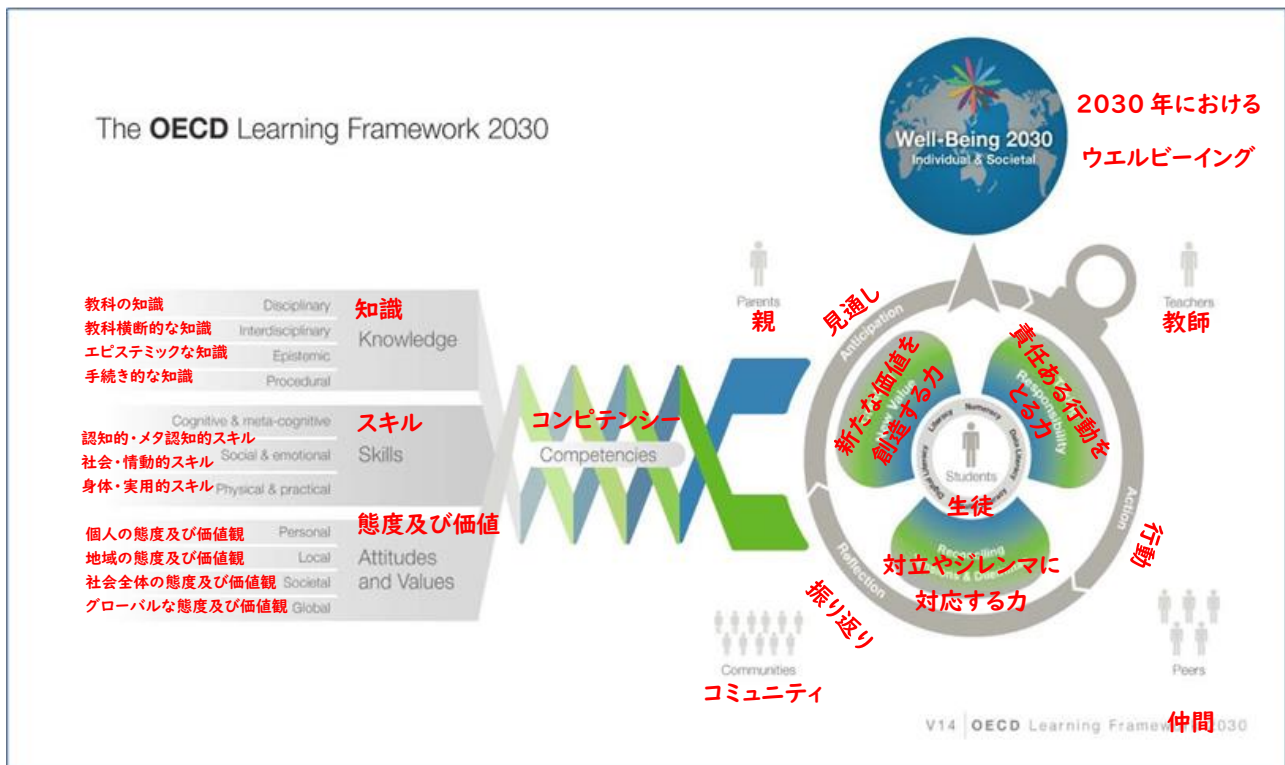


図2 The OECD Learning Framework 2030 を和訳したもの

(3) 本年度の研究の方向性と研究主題

本年度は自分たちが共に幸せになる力をラーニング・コンパスに当てはめ、生徒エージェンシーを発揮するための研究を進めていく。その際に、「生徒エージェンシーの発揮を各教科で目指すわけではない」ことを先にふれておく。Student Agency for 2030 仮訳(2019)では、生徒エージェンシーはあらゆる文脈で発揮されるものとされているが、Leadbeater(2017)は生徒エージェンシーが発揮される主な文脈として以下の4つを挙げている。

- ①モラルについてのエージェンシー
- ②市民としてのエージェンシー
- ③創造性に関するエージェンシー
- ④経済に関するエージェンシー

この Leadbeater が提唱している生徒エージェンシーを発揮する小学校場面を、本校実践で例を挙げると、SDGsの取り組みを進める中で社会に貢献しようとする場面や学級の問題に出合ったときに「自分は何をすべきか」と考えたり、「自分がしたことは正しかったのか」と考えたりし、自ら解決しようとする場面が挙げられる。つまり、それは「CHANGE(本校における総合的な学習の時間の名称)」や特別活動が主たる学習場面であるといえる。

本校の研究スタイルは、各教科からアプローチしていくという立場である。各教科の学習場面から生徒エージェンシーの発揮を単純に目指そうとすると、Leadbeater の4つの姿を引き出すことが研究の目的になって

しまうおそれがある。そうすると本来、各教科で取り組むべき目標に基づく学習内容と乖離した研究になってしまう可能性がある。そこで、各教科の学びを大切にす立場である本校では、「各教科でどのような学びを行えば、生徒エージェンシーを発揮できるかに近づいていけるのか、そもそも教科の学びが生徒エージェンシーとどのような関連や関係性をもっているのか」を主とした研究としていくことを踏まえて、研究主題を次のように設定した。

2023 研究主題

生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(1年次)

2 研究の方法

本研究では、各教科の学びの中に潜んでいる生徒エージェンシーにつながる学びをカリキュラム⁶として意識化でき、どのように学びを展開できれば生徒エージェンシーの発揮につながる素地となる力を身に付けることができるかを明らかにしていくことを目指す。

ラーニング・フレームワークによると、生徒エージェンシーの発揮を可能にするためには、3つの要素があるとされている。

- ① 子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること
- ② 他者と協働しながら自分自身の学習プロジェクトや学習過程を計画する一人一人にカスタマイズされた学習環境
- ③ しっかりとした基礎力をつけること

3つのうちの②に関しては、教科特性に応じて育む。①と③に関しては教科の本質にせまる学びの中で育む。

①～③を繰り返すことで、生徒エージェンシーの発揮を可能にしていく。なお、教科の本質とは、その教科の内容や技能、見方・考え方の習得や活用、学ぶ意義といえる。

石井(2020)⁷は、教科の本質のポイントについて以下のように述べている。

「その授業が『教科の本質』に迫るものであったかどうかというとき、基本的で本質的な内容の理解につながっているかどうかという具合に、内容面からのみ授業の成否は捉えられがちです。しかし、子どもたちの活動や思考のプロセスそれ自体が、その分野の専門家や大人たちが行う知的活動のエッセンスを含んでいて、ホンモノを感じさせるものであるか。こういった観点からも『教科の本質』を理解することが必要です。」

本質にせまるような学びのプロセスの中で子供たちは知識や技能を習得するにとどまらず、習得した知識を活用しようしたり、探究することを通して生活や社会と結びつけたりする姿を期待することができる。

生徒エージェンシーにつながる姿の具体やどのような学びを各教科ですれば生徒エージェンシーの発揮につながる力を身に付けることができるかを明らかにすることを通して、カリキュラムとして明示できるようになるために以下のプロセスを踏む。

⁶ 佐藤学 『カリキュラムの批評』 p.4 ここでいうカリキュラムとは教育課程を指すのではなく、佐藤学氏が述べる「教師が組織し子どもたちが体験している学びの経験(履歴)として定義しておこう」に依拠したものを指す。

⁷ 石井英真 『授業づくりの深め方:「よい授業」をデザインするための5つのツボ』 p.288

- ① 教師が教科の本質を考える。
- ② 教科の本質にせまる授業を単元レベルで構想する。あわせてせまるためのしかけを構想する。
- ③ 授業実践を行う。
- ④ 子供の学びの姿をもとにリフレクションを行い、生徒エージェンシーの発揮につながる姿を記録したり効果的なしかけを蓄積したりする。(子供の発言やノートの記述, 自己評価の記録等)
- ⑤ ①～④を繰り返す。
- ⑥ 2月に研究の成果と課題を研究紀要にまとめる。

以上、研究主題や方法を構想して研究をスタートしていく。本年度の研究を推進することが、本校に関わるすべての人々のウエルビーイングに寄与することを願いとして研究を始めたい。今までの本校研究とはおよそかけ離れた「新たな研究という荒野」に教員と子供たちそして、支えてくれる保護者、関わる方々と共に、旅に出る。それは、コンパスを頼りにした冒険の旅である。道を間違えて後戻りしたり、道なき道を進んでいくことがあったりして何が起こるかわからない。人は不安があっても新たな未知なる場所にたどり着きたい本能がある。そのことを達成するために共々に協力する知恵がある。それらを発揮して新たな学びの履歴を創り出すことそのものが、私たちのウエルビーイングであると信じて研究の旅を始めたい。

引用・参考文献

- ・OECD『Future of Education and Skills 2030 Project background』
- ・OECD『Future of Education and Skills 2030 Conceptual learning framework』
- ・OECD『Student Agency for 2030 仮訳, 2030 年に向けた生徒エージェンシー』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・OECD『教育のスキルと未来: Education 2030 (仮訳)』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・OECD『Learning Framework 2030 (2030 年に向けた学習枠組み)』, 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室
- ・佐藤学『カリキュラムの批評』, 1996, 世織書房
- ・田村学『深い学び』, 2018, 東洋館出版
- ・三宮真知子『メタ認知で<学ぶ力>を高める』, 2018, 北大路書房
- ・溝上慎一『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』, 2018, 東信堂
- ・溝上慎一『学習とパーソナリティ「あの子はおとなしいけど成績はいいんですね!」をどう見るか』, 2018, 東信堂
- ・溝上慎一『社会に生きる個性「自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー」』, 2020, 東信堂
- ・日本教科教育学会『教科とその本質 ―各教科は何を目指し,どのように構成するのか―』, 2020, 教育出版株式会社
- ・合田哲雄『学習指導要領の読み方・活かし方』, 2019, 教育開発研究所
- ・櫻井茂男『学びの「エンゲージメント」』, 2020, 図書文化
- ・奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』, 2021, 東洋館出版社
- ・白井俊『OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来』, 2020, ミネルヴァ書房
- ・石井英真『授業づくりの深め方 「よい授業」をデザインするための5つのツボ』, 2020, ミネルヴァ書房
- ・千々布敏弥『先生たちのリフレクション 主体的・対話的で深い学びに近づく, たった一つの習慣』, 2021, 教育開発研究所